



多読本の選び方

宇野ひかり 25

● 図書館員の文献紹介と資料の活用 ●

本学図書館のスペシャル・コレクションより (61)

蘭学者 桂川甫周が、漂流民 大黒屋光太夫を
尋問して生まれた書物のはなし

奥 正敬 26~29

映画史に残る不朽の名作

本学図書館の所蔵本から (6)

吉田明弘 30

日本の歴史62

『世襲の日本史：「階級社会」はいかに生まれたか』

稲垣宏行 31

文献紹介 (8)

鄭成功と日本と台湾

戸田奈緒子 32

明治期における国際結婚

—文豪ハーンの妻—

田端里美 33

Book Review Corner 34~35

● 図書館利用案内 ●

ライブラリー・カレンダー

2020 (4月~6月) 36

[ГОЛОВНИН, Василий Михайлович]
*Записки флота капитана
Головнина о приключеніяхъ его въ
пльнѣ у Японцевъ 1811, 1812 и 1813 годахъ*
2 vols. Санктпетербургъ, 1816

ゴロヴニン『日本幽囚記』全2巻

V. M.ゴロヴニン 著 高橋景保 校訂
馬場佐十郎ほか 訳

『遭厄日本紀事』

写本 文政八(1825)年 全16巻

ワシーリ・ミカイロヴィッチ・ゴロヴニン (Vasily Mikhailovich Golovnin, 1776-1831) はロシア海軍少佐で後の提督です。イギリス海軍へ派遣され、英仏戦争ではネルソン提督の元で指揮を学んだ彼は1807(文化四)年にディアナ号の艦長として極東へ向い、カムチャッカ半島のペトロパブロフスクへ入港しました。ここを起点に北アメリカのシトカ島で海域調査を行い、千島列島を南下して択捉島までの地図を作製しましたが、1811(文化八)年、彼は国後島にて、南部藩士に捉えられ松前藩によって箱(函)館で幽閉されてしまいます。しかし、ディアナ号の副艦長リコルドが拘束した高田屋嘉兵衛らとの交換により、ゴロヴニンは約2年3か月ぶりに釈放されて帰国しました。

本書はゴロヴニンが帰国後の文化13(1816)年に Санктペテルブルクで刊行した体験記で、拘束中にロシア語などを教え、日本人との交流を持った経験から、日本人の感受性や知性の高さを称え、勤勉さや愛国心を評価しています。

日本では、徳川幕府が同書のオランダ語版の校訂を高橋景保に、翻訳を馬場佐十郎に命じました。馬場の死後は青地林宗と杉田玄白が引継ぎ、文政八(1825)年に『遭厄日本紀事(そうやくにほんきじ)』が完成しました。

なお、今回ご紹介した2つの書物は今年度で開催します稀観書展示会で出展を予定しています。